

古墳壁画の保存活用に関する検討会（第21回）議事要旨

1. 日時 平成28年12月19日（月）14:00～16:00
2. 場所 文部科学省3F1特別会議室
3. 出席者（委員）

和田座長，梶谷副座長，尾登委員，小林委員，西藤委員，佐藤委員，佐野委員，
染川委員，高鳥委員，成瀬委員，林部委員，銚井委員，松本委員，三浦委員，
三村委員，宮下委員，森川委員，矢島委員，柳澤委員

（事務局）

文化庁：中岡次長，山崎文化財部長，齊藤文化財鑑査官，萬谷美術学芸課長・古墳
壁画室長，大西記念物課長・古墳壁画室サブリーダー，光石記念物課長補
佐，朝賀主任文化財調査官，建石古墳壁画対策調査官，青木文化財調査
官，近江文化財調査官，宇田川文化財調査官，横須賀文化財調査官 ほか
独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所：山梨副所長，外間研究推進支援部長，岡田保存科学研究セン
ター長，佐野文化財情報資料部長，早川保存科学研究センタ
ー副センター長，吉田保存科学研究センター保存環境研究室
長，犬塚保存科学研究センター分析科学研究室長，早川保存
科学研究センター修復材料研究室長，佐藤保存科学研究セン
ター主任研究員，川野邊特任研究員 ほか

奈良文化財研究所：玉田都城発掘調査部長，島田研究推進支援部長，津田研究支
援推進部連携推進課長，高妻埋蔵文化財センター保存修復科
学研究室長，内田文化遺産部遺跡整備研究室長，石橋飛鳥資
料館学芸室長，中島文化遺産部主任研究員，降幡都城発掘調
査部主任研究員，廣瀬都城発掘調査部主任研究員 ほか

4. 概要

（1）開会

（2）委員及び出席者紹介

（3）議事

- ・光石補佐から，委員と事務局の異動について報告があった。

① 高松塚古墳及びキトラ古墳の保存活用について

- ・朝賀主任調査官と東京文化財研究所・早川室長から資料2，奈良文化財研究所・高妻室長から資料
3-1，東京国立博物館・和田室長から資料3-2，宇田川調査官から資料4に基づき，キトラ古墳壁画
の修理・輸送・保存管理施設での保管について報告があり，次のとおり意見交換が行われた。

高鳥委員：表現の確認だが，微生物の発生が認められたというのは，修復中ではないか。

早川室長：修復中ではなく，取り外しの作業中。

・青木調査官から資料5に基づき、キトラ古墳指定地内の安全対策についての報告があり、委員より質問等はなかった。

・松本委員から資料6，建石調査官から資料7に基づき，国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の開園、キトラ古墳壁画体験館四神の館の開館について報告があった。

森川委員：私の役割として、まず御礼を申し上げたい。キトラ古墳周辺地区に6万6,000人という数字は、私の感覚からすると、本当に新しい人の流れができた感じがしている。明日香で一番多くの方が来られるのは石舞台周辺で、年間に20万人程度。明日香村全体で年間80万人程度が来られているが、キトラ古墳周辺というのは、今まであまり観光客の方々が来られなかった村の南西端。そこに人が流れるようになった。この周辺は昔は渡来人が多くおられたところで、その興味も出始めたようだ。

資料6で一つだけ弁解しておきたい話がある。来園者の所在地割合で、明日香村が0.9%しかないのは開園前の9月22日と23日に内覧会させていただいており、村民の多くはそのときに行っている。内覧に1,300人ぐらい行かれたと記憶しており、村民5,500人なので、2割以上の方が行かれたことになる。私としてはすごい数字だと思っており、村民の方々が思った以上に興味持たれたと感じている。

12月17日（土）に、明日香村観光協会のボランティアガイドのウォーキングイベントがあった。寒い時期ですから、普通は100人も来られないところに200人ぐらい来られて、飛鳥駅からキトラに向かって歩かれていた。その途中で、渡来人の里の説明をしたり、キトラでお弁当食べたりした。壁画の実物が公開されていないことをみんな知っていながら来てくださって、地階の説明も非常に面白く、これを見たら、あらためて実物を見たくなったというお話を何人かの方から聞いた。できれば、もう少し本物を見る機会の頻度を多くしていただければ、よりありがたい。公開されていなくても、本物があるという存在感だけでも、かなり威力のあるものだと思感している。

ただ、場所が新しいルートになり、例えば周辺が一番近隣の駅は壺阪山駅で、高取町になる。そちらへ行く道が分かりづらいとか、公園の物販とかをもう少し検討し、商品開発からもう少ししないと、思いのほかいろいろなものが売れたりするので、もう一度組み直そうと思っている。委員の皆様方でお気付きあった点、いろいろ御紹介いただければ、村で対応できること、あるいは周辺の団体で対応できることもあるかと思うので、お話をしていただければと思っています。

あと1点だけ、キトラ古墳の墳丘に、寒い時期でも結構行かれているが、正面に立って、「うーん、これがそうか」で終わってしまう。私は説明する機会が多いので、いや、実はここに本当に石室がありますとか、そういうようなことをしゃべることになってしまう。検討の余地はあると思う。

色々お話ししたが、本当に御礼を申し上げたい。ありがとうございました。

・奈良文化財研究所・高妻室長から資料8-1に基づき、紫外線蛍光スキャニング及び分光分析実施のための安全性評価試験について説明があり、次のとおり意見交換が行われた。

和田座長：表の中のエンジとエンジュの違いを御説明いただけますでしょうか。エンジュというのは、エンジュの木からとれる染料ですか。

高妻室長：そうだ。

成瀬委員：100回とは、時間はどのぐらいの感じになるのか。

高妻室長：おおよそ女子群像ぐらいの西壁の1とか西壁の3とか東壁の3ぐらいの大きさの面積を考慮していただくと、1回のスキヤニングが大体40分。

成瀬委員：色差、 ΔE で評価しているというが、分光測色計を用いて ΔE を判断する、スキヤニング可視画像を用いての評価は肉眼で判断ということか。

高妻室長：分光測色計を用いて色差、 ΔE を測定した。それと、掲載しなかったが、同時に可視分光分析による分析もやっている。得られている結果からは、確かに2回と100回と比べると変化はあるが、その変化は一回一回の照射の中での誤差とそう変わらない程度という結果が得られている。

成瀬委員：データを見ていると、10回やっても2回とそう変わらないので、余り律儀に1回だけの予定とか言わない方がよいのではないか。測定がうまくいかないこともあり、その場合は繰り返しやっても、このデータがあるので、よいと思う。

和田座長：壁画を傷めないよう配慮していただき、この紫外線を使ったスキヤニングを行うことを、ここで了承いただいてよいか。(全員了承)

・奈良文化財研究所・高妻室長から資料8-2に基づき、高松塚古墳壁画の材料調査について説明があり、次のとおり意見交換が行われた。

和田座長：これは漆喰の傷み具合が分かるということか。傷んでいけば、対処の方法とかあるのか。それはこれからか。

高妻室長：まずは現状を押さえるということで、漆喰内部の情報を集積しているという状況。

佐藤委員：先ほど何えよよかったのだが、キトラ古墳壁画の保存管理施設について、職員の体制を伺いたい。

建石調査官：四神の館の職員の配置は、常勤研究員1名、任期付き研究員2名、事務系職員2名。ただし、これ以外に飛鳥資料館、都城調査部、埋文センター等、奈文研全体でカバーしているのが実際である。そうでないと土日のやりくりもできない。壁画の公開がないときも含めて、この体制を奈文研全体の中でやりくりしている。第1回目の壁画公開のときは、文化庁職員も土日に現地で一緒に仕事をした。

佐藤委員：四神の館には、国交省の方もおられるのか。

建石調査官：今申し上げたのは、文化庁が担当している四神の館の上の階の話。それとは別に、国交省及び関係機関の方々が下の階を担当されており、連携しながら仕事を進めている。

佐藤委員：国交省には、どれぐらいのスタッフがおられるのか。

松本委員：そもそも飛鳥歴史公園自体の運営維持管理を、包括的に国交省から委託をしており、その中で管理センターという形で、本部は高松塚地区にあるが、その一環で管理をしている。繁忙期や状況でいろいろ変わるが、全体としてやりくりをしながら管理をしている状況。

森川委員：管理センターの方で包括的に、人を四神の館に入れていただいて、実際の受付とかは、村民がそこに入れていただいてやっている。明日香村の方で受付やっているのが、例えば、韓国語のしゃべれる方や、もともと地域振興公社で働いていた、いろいろ

ろ飛鳥のことをよく知っておられる方、そういう方を受付に配置している。あと、かなり地域のことをよく知っておられる方が、国交省の管理に参加をさせていただいているという状況だ。

和田座長：それはボランティアという形か。

森川委員：管理センターの総括的な委託に、契約関係を持っている。

和田座長：実際の古代体験とか、いろいろ子供に指導されている方は、そういう方がされているのか。

森川委員：ガラスの体験とか、土日はやっているが、そちらはボランティアの方が参加されている。

染川委員：森川村長の発言に少し安心したが、これだけの予算を掛けて研究も深くされているこの施設なのに、余りにも人数が少ないのではないかと思う。いかにも日本らしい話と思う。今後、常勤の方を増やしていけるような状況というものはあるのか。

萬谷課長：当面この人数でキトラの運営を行い、その状況を見ながら、必要に応じてということになるかと思う。

染川委員：大いにあるので、今、申し上げた。

和田座長：直接接していただく方のおっしゃることは、非常に大事な言葉になるので、古代体験でも何でも、十分訓練されていない人が行った場合には間違っただけで教えるという可能性もあるところ、全体の責任がどういう格好になっているかは大切。建物全体の実際の管理について、体制を組んでいただいて、そこで子供に接する方法も検討していただく必要は十分あるかと思う。そこを充実させていかないと、せっかくの建物の意味もなくなってしまうので、是非とも考えていただきたい。

森川委員：全体的な使い方となると、村の責任もあるかと思うので、発言させていただく。先ほども申し上げたように、飛鳥京のボランティアガイドの方々には、ある程度一定の勉強をさせていただいた上で、かなりきっちりした形で動かしていただいている。ただ、各施設がオープンになっているときとなっていないときとがあり、常々というのは効率的に難しいという感覚は持っているが、できるだけ飛鳥のこと、キトラのことをよく知っている方にさせていただけるよう心掛けていく。

文化庁、国土交通省、明日香村が議論をできるだけする場を作っていこうと思っており、深めていきたい。さらに県立橿原考古学研究所とも連携を図りながら、できるだけ丁寧に説明する仕組みを、今後考えていきたい。

和田座長：非常に大事なことだと思うので、是非よろしく願いいたしたい。

小林委員：今の件に関連してですが、四神の館の情報をホームページ等で検索すると、奈文研、国交省、明日香村と、様々なところから何かばらばらにつながっていくような状況に見受けられる。特に体験プログラムについて、どこかで聞こうかと思っていたが、どのような体験ができるのかが、うまくまとまって出てくるページがなくて、最終的にPDFにつながるようなことがあった。

矢島委員：今、森川委員からも話があったように、関係する皆さんが知恵を出して、現実の具体的な活用の仕方、全体としてフィールドミュージアムと考えてもいいような組立てなので、四神の館だけではなく、高松塚も含めて、あるいは明日香村全体を含めてと言ってもいいのかもしれないが、村の進められていることを含めて、具体的な活用の

展望策をそれぞれお持ちだと思うので、それを上手に調整していただくとよいのではないか。

② 平成28年熊本地震における装飾古墳の被災状況及びその対応について

- ・熊本県・村崎補佐から資料9-1、近江調査官から資料9-2に基づき、熊本県における装飾古墳の被災状況と、検討委員会について説明があり、次のとおり意見交換が行われた。

三村委員：基本的に、石組みと土盛りの建造物というのは、耐震性は全くないので、どこで地震が起こっても、こういうことが起こるという前提で議論をする必要がある。制約が非常に多い建造物で、簡単に耐震補強しようということがなかなかできない中で、知恵を出さないといけない。

和田座長：次年度以降、どういうことを考えているか、今言えることがあれば聞きたい。このまま熊本県にお願いするという形では、県は熊本城だけでも足りないという格好で、なかなか装飾古墳まで…というところがあるかと思う。国も、この委員会も含めて、これは古墳壁画の保存に関する検討会で、こちらの要望を積極的に出していくことも必要かと思う。

建石調査官：先生方にも非常に御心配をお掛けしておるところ。今年度で全ての方向付けができるという話ではなく、3月にまた熊本で委員会を開催する予定なので、そこで見えてきた課題を来年度にどのように引き継げるのかということ、文化庁としても考えていかなければならない。先生方にもいろいろな形で御相談申し上げると思うので、よろしく願いたい。

和田座長：全国どこにでも起こることを見通した考え方を打ち出せる形を、何らか考えて、先生方にも御協力いただいて、対策を練っていくことができればと思う。ぜひ、積極的な取組をしていただきたい。

③ その他

- ・建石調査官から参考資料に基づき、世界考古学会議第8回京都大会（WAC-8）における壁画古墳セッションについて報告があった。

(4) その他

事務局から、次回は年度明けになる見込みで、後日、調整票をメールで送信することを連絡した。

(5) 閉会

(以上)